

冬号



民話を楽しもう

げんのうおしろう きゅうび きつね
源翁和尚と九尾の狐

あんどのじ
安穩寺に伝わる伝説

文・結城市教育委員会
挿絵・佐々木 明

昔、昔、ずっと大昔の中国に殷という国がありました。殷の領土、冀州に住んでいる蘇護という人の娘に寿羊という十六さいになる少女がいましたが、顔だちも姿も大変美しく、評判になり、その噂を聞いた王様の紂王はたびたび使いを遣わして遂に蘇護を説き伏せ、娘を宮中に仕えさせることになりました。

寿羊の行列が都に向かって旅をしている途中、恩州という所で宿をとりました。入浴した食も終わり、夜に入って、一同屋の疲れでぐっすり寝こんでいるときに、寿羊の休んでいる部屋に、さっと、生臭い風が戸のすき間から吹き込んだとみる間に、ふしぎなことに部屋の中もしびというともしびがふっと消えて、まっ暗闇となってしまうました。そしてその闇の中に、全身が金色の毛におゝわれ、顔が白く、尾が九本もある古狐、後に九尾の狐として恐れられた神通力を備えた狐が見えるではありませんか。狐は寿羊をかみころし、寿羊に化けて王城に入っていました。

王様が宮中に到着した寿羊をご覧になると聞きしにまさる絶世の美人、紂王はすっかりお喜びなされ、名を妲己と改めさせ、側近く仕えさせることにしました。

それからの紂王は、まったく政治をかえりみず、毎日毎夜酒盛りをするやら、国のお金をふんだんに使って、まばゆいばかりのご殿をいくつも建て、るやら、思いのままのぜいたくを始めました。人々は苦しみ、悲しみ、だんだんと紂王から国民の心は離れていってしまいました。そのころ、西伯侯という聖人がいました。この人は後に周の文王になられた方で、自分の治めている地方でよい政治をしたから人々にたいそう慕われておりました。また、渭水という川のほとりで釣をしている人が、たいそう智謀にすぐれていることを聞くと、何回もその庵を訪れ、礼を尽くして軍師として迎え国の守りに役立てようともしました。この人が太公望という人です。西伯の死後、子の姫発（後、周の武王）は、太公望と共に殷の都、洛陽を攻め、敗れた紂王はついに鹿台というご殿に火を放って自刃してしまいました。殷の湯王が天下



太公望

を統一してか

ら六百四十余年、二十八代に

してここに殷の国は亡んでしまったのです。九尾の狐の化身、妲己も太公望にとらえられ、処刑されて数十尺も深い地中に埋められました。あの日術魔術にたけた老狐が、そのまま土中に埋すもれてしまったのでしょうか。

その後、九尾の狐は、南天竺（今の印度）耶錫国の斑足太子の皇后、華陽夫人となりましたが、善婆（名医）により妖怪と

見破られ飛び去って姿をけしました。その後、中国では十三世幽王の皇后、褒姒と名のつていましたが、諸侯の犬戎王に攻めほろぼされ幽王とともに斬られてしまいました。

それから時代は下って中国は唐の時代、遣唐使の一人、吉備公が学問を修めていよいよ帰国する船中、十六、七才の若藻という美女が現れ、日本へ連れて行ってほしいと頼まれると一同、これを許すことにしました。博多に着いた一同は久方振りの帰国さわぎでこた返している間に、あの少女は姿を消し見失ってしまいました。この少女こそ例の九尾の狐だったことは後になってわかったことでした。

承徳二年弥生の半ば、坂部庄司藏人行綱が家路を急ぐその時に、まだ七夜もたたぬみどり子が、綾羅の衣に包まれて捨ててあるのでした。行綱には子どもがなかったの、ふところに入れ、妻にも話をすれば大喜び、藻と名をつけて育てました。

藻も七歳になり、まことに可愛く利発者、手習い、ものよみはいっまでもなく、諸芸に秀で、特に和歌の道にも通じておりました。



十七歳になった藻女は、容姿すくれ、博学秀才、歌道その他諸々のわざに至らざるなく心だても優しかったので、鳥羽天皇はことのほか藻女を愛しておられました。

元永三年秋の末、詩歌管弦にすぐれた者が集まり催しがあり、詩を賦し、和歌を詠じ、終日の盛宴は夜にはいってもはてる気配もありません。その時にわかに雲起こり、さっと吹き出した強い風に殿中の燈火ごとごとく吹き消され、一寸も見えない真の闇、一同の者が驚き騒いでいる時に御殿の中にあやしい光、たちまち風のように照り輝いたので、人々はあやしみ、いぶかしがった。これは藻女の身辺から出た光であった。多くの者が心配する中で天皇だけは少しも不思議なことに感じず、これは彼女が生まれながらの秀才で、聖教の道も悟り、心も曇りないため、あたりまえのことであるとし、即座に玉の一字を賜わり、玉藻前と呼ぶことになりました。

そのうち天皇はご病気になるれてしまいました。そして医者が診察しても種々の靈薬を献しても一向に快復なさりませんでした。この時陰陽博士の阿部泰親が伝え聞き一心に占いをたてたところ「人間でないものが君側にあって君を悩まし国を乱そうとしている。」という卦が出ました。そこで天皇に申し上げましたところ何度申し上げてもお聞き入れにならず、かえって玉藻前のために閉門されてしまいました。泰親はこの上は神仏の加護を蒙らんと一心に祈願するに、



夢に神様が現われ、「**曇目鳴弦**の法を修せばたちまち正体を現わさん。」とのお告げがありました。そこで清涼殿の一角に祈壇いとうを設け、十七日の満願まんがんの日に玉藻前のお出でを願ねがいすかさず曇目の弓の弦を三度うち鳴らすと、みる間に

玉藻前の顔色は土のようになり、目は血走り、すくくと立つと風を呼び、雲を招き、体は金毛白面きんもうはくめんの九尾の狐となって南東の方角に飛び去ろうとするではありませんか。さて、壇上の青い御幣ごひが落ちているところには必ず九尾の狐がひそんでいるにちがいないと、全国にその旨を命令して探させましたところ、関東は下野国那須郡の領主に那須八郎宗重という領主が領内を見まわらせたと、

那須野の原に青色の御幣が一本落ちていたのを見つけました。そればかりでなく領内の百姓たちが一人、二人と行方不明になったとの訴えもありました。そして日がたつにつれ、日に二十人、三十人と届けがすぎつぎにされるようになってきました。往來の人も絶え、農地も荒れて飢饉に苦しみ、そのまゝに捨ておくことができないう状態となりました。これこそ九尾の狐のしわざにちがいないと、朝廷では安房国の三浦介義純と上総国の上総介広常の二人にその退治を命

じました。二人は一万五千余の兵をひきい、那須野をさして出発しましたが、丹誠をこらして神仏に祈願し、三浦介は靈夢に弓矢を、上総介は同じく神槍を与えられましたので、勇氣百倍、那須野ヶ原の野狐退治が始まりました。

九尾の狐は、泰親の祈とうによって空の飛行を封じられており、一万五千の人数で追いつてられましたがなかなか姿を現わしません。そして三日目、ものすごい異臭鼻をつくと感じるまもなく、小牛ほどもあり、全身金色の毛でおゝわれ、身のたけ七尺余、一寸五尺もある九本の尾を振りたて眼光ららんと輝く怪物が毒焰を吐きつつおどり出て、人といわず、馬といわず、かみ殺し、蹴散らし、その様はこの世のものとは思われないすこさでした。三浦介は、この時とはばかり深く心を神仏に念じ、神授の弓に矢をつがえて射れば、矢はあやまたず狐の脇腹を深く射透しました。上総介がすかさず馬からとびおり、神力のこもった靈槍をもって狐をしとめたところ、野狐の屍は大きな石に変じてしまいました。

それにしても、かの九尾の狐は一たび化しては股の天下をほろぼし、二たび化しては斑足太子の聡明をおおい、三たび化して西周をほろぼし、さらに日本に渡り、四たび玉藻前と変じて君側をけがし、今また五たび変じて石塊となったのです。

そして九尾の狐が殺生石と化してから二百三十余年の後も殺生石に触れるもの、人も獣も鳥も、すべて毒気のために死んでしまいます。朝廷ではたいそう憂い、全国の高僧に調伏の命を出しましたが、いずれも途中毒気に倒れて目的を果たすことができませんでした。

この頃、源翁和尚、下総、下野を行脚せられていました。この事を聞き、多くの人々の悲しみ、嘆きをみるに忍びず、ある日那須野に向いて行きました。源翁和尚は九尾の狐のさまたげも乗りこえて難なく殺生石の前に至り、法力をもって三たび石を打ち、一喝して引導を渡しました。すると空中より「われは執念、迷いの雲にのり、三千世界を魔界にしようとしたが、今は和尚の教化を蒙り、霧が晴れて悟りを得ることができた。」と声がし、あたりは静かなようすとなったという。そしてそれ以降、人畜

が殺生石の災いから救われたということです。そのことが天皇のお耳に達し、源翁和尚に対し、大寂院法王能照禅師の勅号を、そして、安穩寺には「結城山」の勅額を賜りました。当時結城家十六代の城主直光公が源翁禅師の徳を慕い、招いて安穩寺の開山としました。現在、安穩寺には、後小松天皇下賜の「結城山」の勅額、源翁禅師着用のおけさ、殺生石を濟度した折の弘子と数珠（県有形文化財に指定）、玉藻前が使用したといわれる鏡等が寺宝として残されています。

なお、昔は狐にとりつかれて気がおかしくなったのだとされていた狐つきの人は、安穩寺へ行って祈禱してもらおうと狐が離れるといわれ、栃木県の方からも祈禱に來たそうです。また、今は門外不出の、源翁和尚の数珠を狐つきに触れさせると治るといので、数珠を借りに來たこともあったようです。また、狐つきかどうかを調べるとは安穩寺の山門をくぐらせてみればわかるとかで、狐つきは怖がって山門をくぐらうとしないということです。

また、源翁和尚が那須野に



安穩寺山門

おもむき、殺生石の前に立ち、三たび錫杖で石を打ったところ、石が砕けたというところから、金槌のことを玄能というようになったのだそうです。

※途中文章の省略あり

おしまい

